

## 友人関係における動機づけが対人葛藤時の 対処方略に及ぼす影響<sup>1)</sup>

本 田 周 二

鳴門教育大学予防教育科学センター

本研究の目的は、友人関係が形成、維持される理由の多様性に焦点を当て、友人関係における動機づけが同性友人との葛藤時の対処方略および友人関係満足感に及ぼす影響について検討することであった。東京都内の短大および専門学校生、兵庫県内の大学生218名に質問紙調査を行った。構造方程式モデリングによるパス解析の結果、「内発的動機」から統合スタイルへの正のパスが有意であった。さらに、「外的」から強制スタイル、「取り入れ」から回避、自己譲歩スタイルへの正のパスが有意であった。また、重回帰分析の結果、「取り入れ」から友人関係満足へは負のパスが有意であった。本研究により、現代青年においては、内発的な動機に基づく友人関係だけではなく、外発的な動機に基づく友人関係も存在しており、両者は異なった対人行動を導くこと、そして、外発的な動機である「取り入れ」による友人関係を持つ傾向が高いほど、友人関係満足感が低いことが示された。最後に、外発的な動機に基づき友人とつきあう理由について考察した。

キーワード：友人関係、動機づけ、対人葛藤方略

### 問題および目的

本研究は、友人関係における動機づけ、友人との葛藤時の対処方略、友人関係満足感の間の関連について検討することを目的とする。人は、日々さまざまな対人関係の中で生活をしている。中でも、高校生や大学生などに代表されるような青年期においては、他の年代に比べて友人関係が非常に重要な役割を果たしている（福岡・橋本，1997；遠矢，1996）。内閣府が実施している世界青年意識調査によると、日本の青年は「悩みや心

配事を相談する相手」に近所や学校の友だちを挙げる割合が多く、学校に通うことの意義として「友だちとの友情を育むこと」を挙げる割合が多い（内閣府政策統括官，2004）。友人関係といえ、同性友人関係を指すことが多く（和田，1993）、さまざまな研究から同性の友人関係が個人にとって大きな支えになることが示されている（e.g., Bagwell, Bender, Andreassi, Kinoshita, Montarello, & Mukker, 2005）。本田（2009）は、日本における青年期の友人関係研究のレビューを行い、友人関係の特徴についてまとめている。青年期における友人関係の特徴とは、個人の精神的健康を促進し（丹野，2007）、情緒的な拠り所となる（柴橋，2004）関係であり、友人と親密で深い関係を築くことが望ましいと考えられている。

しかし、一方で、傷つくのを恐れて友人との関係が深まることを拒絶する表面的な友人関係を持

1) 本論文をまとめるにあたり、貴重なご助言をいただきました小石寛文先生（神戸学院大学）、木村昌紀先生（神戸女学院大学）、ならびに調査実施にご協力いただきました永房典之先生（新渡戸文化短期大学）、佐藤史緒さん（東洋大学）に厚く御礼申し上げます。

つ青年の存在（岡田，1993）や，友人関係の特徴として，状況に応じて自己や付き合う相手を切り替える傾向（大谷，2007）が指摘されている。また，子ども生活実態基本調査によると，中学生や高校生は仲間はずれにされないように話を合わせることや，友だちとのやりとりで傷つく経験をしていることが明らかになっている（Benesse教育研究開発センター，2010）。仲間はずれにならないように，相手からの評価を気にしながら，必要以上の過度な気配りを必要とする友人とのつきあい方は，親密さや関係としての楽しさによって特徴付けられた個人的，自発的な関係（Baumeister & Vohs, 2007）としての友人と比べて，本人にとって非常にストレスフルであると考えられる。

このように，青年期の友人関係にはポジティブな側面とネガティブな側面の両方が存在しているが，これまでの研究ではどちらかというところポジティブな側面が強調され，検討がなされてきた。しかし，近年の研究ではネガティブな側面に焦点を当てた研究も報告されつつある。

上述したような友人とのつきあい方の違いは，友人関係を形成，維持する動機の違いによって説明が可能であろう。人は楽しいからという理由以外にも，一緒にいることで何かしらのサポートを得ることができるのではないかと打算的に考えても友人との関係を維持することがある。また，友人がいないことに対する不安からも友人を求める可能性がある。この点は，友人関係が外的な報酬や罰，他者からの働きかけによって維持されることがある（岡田，2005）という研究からも示唆される。

### 友人関係における動機づけ

岡田（2005）は，動機づけの観点から友人関係を捉え，友人関係における動機づけ尺度を作成している。この尺度は，動機づけ理論の1つである自己決定理論（Ryan & Deci, 2000）に基づき作成された尺度である。自己決定理論とは，非動機づけ，外発的動機づけ，内発的動機づけという3

つの動機づけ状態を想定し，自己決定性の概念を元に，スポーツや学習，対人関係などさまざまな領域における動機づけを包括的に捉える理論である（岡田，2010）。

友人関係における動機づけ尺度は，自己決定性の程度により外的な報酬や他者からの働きかけによって行動が開始される「外的」，不安や義務の感覚から，あるいは自己価値を維持したいために行動する「取り入れ」，個人的に重要であるからといった理由で自発的に行動がなされる「同一化」，興味や楽しさなどのポジティブな感情によって動機づけられる「内発」の4つの下位尺度から構成されている。自己決定理論の観点からすると，自律的に友人と積極的な相互作用を行うことが適応的な結果を導くと考えられる（岡田，2005）。4つの下位尺度のうち，「同一化」や「内発」に関わりのある友人関係とは従来から扱われてきた親密さなどに基づく友人関係であると考えられる。そして，「外的」や「取り入れ」に関わりのある友人関係は，近年，焦点を当てられている表面的な友人関係や，相手からの評価を気にするために，過度に気配りを行う必要のある友人関係に対応していると考えられる。

友人関係における動機づけに関しては，自己決定性の高い動機づけである同一化や内発などの動機づけが，友人への向社会的行動を促進すること（岡田，2005），中学生において内発が笑い話などの自己開示を促進し，外的，同一化が深く傷ついた出来事などの内面的な自己開示を促進し<sup>2)</sup>，学校享受感に影響を与えること（岡田，2006）や，動機づけの高さが学習時に友人へ援助を求めることや相互学習を促進すること（岡田，2008）などが明らかにされてきている。

2) 同一化だけでなく外的が内面的な自己開示を促進した理由として岡田（2006）は，悩みなどの開示には自己のネガティブな感情の低減のためという目的があり，その手段として用いられるという外発的な側面もあることを指摘している。

このように、友人関係における動機づけに関しては、自己開示や学校享受感、学習時における援助要請、相互学習との関連が検討されてきた。そして、自己決定理論で予測されている通り、自律的な動機づけが友人との積極的なコミュニケーションを促し、その結果、友人関係における適応に影響を与えることが明らかにされてきた。

これらは、主に友人関係において自己決定性の高い動機づけに着目して検討を行ってきたと言えるだろう。しかし、現代の友人関係における特徴の1つと考えられる表面的なつきあい方や過度の気配りが必要なつきあい方という点を考えると、自己決定性の低い動機づけである外的や取り入れにも着目する必要があるだろう。動機づけの違いが相手とのコミュニケーションにおいてどのような影響を与えているのか、そしてコミュニケーションの結果、友人との関係満足に影響を与えているかについて明らかにすることは、現代の青年における友人関係の特徴を捉える上で重要であると考えられる。そこで、本研究においては、コミュニケーション場面として友人との葛藤場面を取り上げる。そして、そこでの対処方略と関係の満足感に着目する。青年期においては、友人と関わり合うことが多いため、さまざまな相互作用を行っていると考えられるが、普段は相手からの評価を意識することは少ないだろう。しかし、友人と意見が対立するような場面では、お互いが二人の関係を再評価し(本田, 2008)、そこでの行動がその後の関係に影響を与えると考えられる。

#### 友人関係における動機づけと対人葛藤対処方略

対人葛藤とは、他者との顕在的・潜在的対立を含む社会的状況であり、当事者の葛藤対処方略によって葛藤の結果が左右される(大淵・福島, 1997)。これまでの対人葛藤研究において、葛藤対処方略に関する研究は数多く行われてきた(e.g., 長峰, 1999; Rahim & Bonama, 1979; Rubin, Pruitt, & Kim, 1994)。Rubin et al., Pruitt, & Kim (1994) は、自己の利害への関心と他者の利害へ

の関心の2次元により解決方略を4つに分類する二重関心モデルを提案している。このモデルでは、自己と他者への利害への関心への動機づけの高さによって選択される方略が異なることを想定している。加藤(2003)は、Rahim & Bonama (1979)の対人葛藤方略の2次元5スタイルを参考に、対人葛藤方略スタイルを測定する尺度を作成し、対人葛藤方略スタイルと友人関係満足感、心理的ストレス反応、孤独感との関連を検討している。この尺度は、自己志向的次元と他者志向的次元の2次元から構成されており、どちらの志向も高い「統合」、自己志向が高く、他者志向が低い「強制」、自己志向が低く、他者志向が高い「自己譲歩」、どちらの志向も低い「回避」、どちらも中程度である「相互妥協」の5スタイルによって葛藤方略を捉えている。分析の結果、統合スタイルを多く使用する人は友人関係満足感が高く、強制スタイルを多く使用する人は友人関係満足感が低いことを明らかにしている。また、大淵・福島(1997)は、葛藤解決における社会的動機に着目をし、「関係目標」「パワー・敵意目標」「公正目標」「同一性目標」「個人的資源目標」「経済的資源目標」という6つの目標と対処方略との関連を検討している。そして、関係目標が協調方略、第三者方略に正の影響を与えること、パワー・敵意目標が対決方略に正の影響を与えること、同一性目標が協調方略に負の影響、回避方略に正の影響を与えることを明らかにしている。加藤(2003)における統合スタイルと協調方略、強制スタイルと対決方略、回避スタイルと回避方略はそれぞれ内容が対応していると考えられる。他にも、藤森(1989)は、対人葛藤時の解決ストラテジーが相手への好意度に影響を及ぼしていることを明らかにしている。このように、対人葛藤の研究において、当人の動機に着目した研究が行われてきており、葛藤時にどのような動機に基づくのかによって対処方略が異なることが明らかにされている。

それでは、友人関係における動機づけ、対人葛藤方略、友人関係満足感にはどのような関連が予測されるのだろうか。まず、友人関係における動機づけと対人葛藤方略との関連について加藤(2003)や大淵・福島(1997)などの研究結果を踏まえて考える。他者からの働きかけによって行動が開始される「外的」は、自分からというよりも相手からの働きかけによって続いている関係であるため、関係へのコミットメントは低いと考えられる。そのため、友人との葛藤時には、相手に対して自分の優位な立場を維持することが目標となる可能性が高い。そのため、自己志向が高く、他者志向が低くなると考えられ、その結果、「強制」が促進されると予測される。そして、不安や義務の感覚によって行動が開始される「取り入れ」は、相手からというよりも自分からの働きかけによって続いている関係であるため、関係へのコミットメントが高いと考えられる。そして、過度に気配りをする必要がある友人関係と対応していることを考えると、友人との葛藤時には、自分を抑えて、相手からの評価が下がらないようにすることが目標となる可能性が高い。そのため、自己志向が低く、他者志向が高くなると考えられ、その結果、「自己譲歩」が促進されると予測される。もしくは、相手からの評価が下がることに対する不安から、相手との対立を避ける方略である「回避」が促進されると予測される。自発的に行動が開始される「内発」や「同一化」は、どちらも自己決定性の高い動機づけであり、これまでの研究により自己決定性の高い動機づけは、友人との円滑なコミュニケーションを促進することが明らかとなっている。藤森(1989)は、対人葛藤時に、相互の利益になるような解決策を模索する促進・協調型が、葛藤解決後の不満や相手に対する敵意が最も低いことを明らかにしている。このように考えると、「同一化」や「内発」は、友人との葛藤時に、自己志向、他者志向のどちらも高くなると考えられ、その結果、「統合」が促進され

ると予測される。

次に友人関係における動機づけと友人関係満足感について考える。友人関係における動機づけに関する先行研究において、自己決定性の高い動機づけは、友人関係における適応に影響を与えることが明らかとなっている。そして、対人葛藤に関する先行研究において、統合スタイルを多く使用する者は友人関係満足感が高く、強制スタイルを多く使用する者は友人関係満足感が低い(加藤, 2003)ことが明らかとなっている。これらを考えると、自己決定性の高い動機づけである「内発」や「同一化」は高い友人関係満足感と関連し、自己決定性の低い動機づけである「外的」は低い友人関係満足感と関連すると予測される。

以上のように、本研究では、友人関係における動機づけと友人との葛藤時における対処方略、友人関係満足感との関連を検討することで、現代青年の友人関係において見られる2側面の特徴の違いを明らかにする。

## 方 法

### 調査対象

東京都内の短期大学2年生および専門学校1年生101名、兵庫県内の大学2年生117名の計218名を対象に調査を行った。

### 調査内容

1) 同性友人のイニシャル：親しいと感じている同性の友人のイニシャル(1名)を記入してもらった。2) 同性友人との親密度：イニシャルを記入してもらった友人との親密さについて「1. 全く親しくない」から「6. とても親しい」までの6件法で回答を求めた。3) 対人葛藤場面：イニシャルを記入してもらった友人との間で生じた対人葛藤場面として2つの場面を提示した。対人葛藤場面には自分に責任のある場面、相手に責任のある場面、どちらも責任はないが意見が分かれる場面という3つが考えられる。本研究においては、現代青年に特徴的な相手への気配りが必要な

友人関係についても検討を行うため、自分に責任がある場面を除いた2つの場面を用いることとし、藤森（1989）や加藤（2003）、大淵・福島（1997）の研究を参考に独自で作成した。①旅行の話し合い場面「あなたは、友人と2人で旅行に行く約束をしています。今日は、その旅行の計画を立てるために2人で打ち合わせをしています。打ち合わせを進めていく中で、旅行の計画について友人と意見が合わなくなりました」、②約束の反故場面「あなたは数日前に、友人と一緒に遊びに行く約束をしました。しかし、当日に友人から『他の友人と遊びに行く約束が入ってしまったから行けなくなった』とメールが入ってきました。

4) 対人葛藤方略：加藤（2003）の対人葛藤方略スタイル尺度（20項目）を用いた（Table 1）。この尺度は、「統合スタイル」「回避スタイル」「強制スタイル」「自己譲歩スタイル」「相互妥協スタイル」の5つの下位尺度（各4項目）から成る。それぞれの場面を読ませた後に、「このような状況の時に、あなたはどのような行動をとりますか、あてはまるところに○をつけてください」という指示を行い、「1. あてはまらない」から「4. あてはまる」の4件法で回答を求めた。5) 対人葛藤方略（頻度）<sup>3)</sup>：イニシャルを記入させた友人との間で実際に起きたことについてたずねた。「この1年の間に、あなたが次のような行動をとったことはどのくらいありましたか」という指示を行い、加藤（2003）の対人葛藤方略スタイル尺度（20項目）について、「1. 全くなかった」から「5. 非常にあった」の5件法で回答を求めた。

6) 友人関係における動機づけ：回答者の友人関係全般における動機づけを測定するために、岡

3) 場面を想起させるだけでは、実際にどのような対処方略をとっているのかまでは明らかにすることができない。そこで、現実にはどのような対処方略を友人に対して行っているのかについてその頻度をたずねることで動機づけの違いによる対処方略の違いを検討することとした。

田（2005）の友人関係における動機づけ尺度を用いた（Table 2）。ここでは、上記のような特定の友人に対する動機づけではなく、回答者の友人関

Table 1 対人葛藤方略スタイル尺度（加藤，2003）

統合スタイル	お互いの利益になるような決定をする お互いに満足するような結論を見つけ出そうとする お互いの目的を支持する 最良の結果が得られるように、お互いの考えを理解する
回避スタイル	お互いの意見の相違に直面しないようにする 出来る限り口論にならないようにする 相手との衝突を避けようとする 対立を防ごうとする
強制スタイル	自分の意見を押し通すために、いろんなことをする 自分にとって有利な結果を得ようとする 自分の立場を押し通そうとする 自分の意見を通そうとする
自己譲歩スタイル	友人の要求に従う 友人の目的に添うようにする 友人の望み通りにする 友人の考えを認める
相互妥協スタイル	お互いの意見の間を取ろうとする お互いの意見を水に流すよう主張する お互いの妥協点を探そうとする お互いの意見の歩みよったところで、取り決めようとする

Table 2 友人関係における動機づけ尺度（岡田，2005）

外的	親しくしていないと、友人ががっかりするから 友人関係を作っておくように、まわりから言われるから 一緒にいないと、友人が怒るから 友人の方から話しかけてくるから
取り入れ	友人がいないと、後で困るから 友人とは親しくしておくべきだから 友人がいないのは、恥ずかしいことだから 友人がいないと、不安だから
同一化	友人のことをよく知るの、価値のあることだから 友人関係は、自分にとって意味のあるものだから 友人といることで、幸せになれるから 友人と一緒に時間を過ごすのは、重要なことだから
内発	友人と一緒にいるのは楽しいから 友人と親しくなるのは、うれしいことだから 友人と話すのは、おもしろいから 友人と一緒にいると、楽しい時間が多いから

係全般に対する動機づけについてたずねた。この尺度は、「外的」「同一化」「取り入れ」「内発」の4つの下位尺度（各4項目）から成る。「あなたの友人に対する態度全般についてお聞きします。なぜ友人と親しくしたり、一緒に時間を過ごしたりしますか？ それぞれの文章についてもっともあてはまる数字に○をつけてください」という教示を行い、「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の5件法で回答を求めた。7) 友人関係満足感：回答者の友人関係全般における友人関係満足感をたずねる項目である。「あなたは、どのくらい友人との関係に満足していますか」という教示を行い、「1. 全く満足していない」から「5. とても満足している」の5件法で回答を求めた。

#### 実施方法

講義中に集団で施行し、その場で回答・回収を行った。また、調査は無記名とした。倫理的配慮について説明し、同意を得た者にのみ回答を求めた。なお、218名のうち、回答に不備のあったも

の、そして同性友人との親密度に関して6件法のうち、3以下であったものを除いた201名を分析の対象とした。

## 結 果

各尺度の平均値、標準偏差および $\alpha$ 係数をTable 3に示す。それぞれについて平均得点を分析に使用した。なお、友人関係における動機づけ尺度の「内発」と「同一化」に関しては、変数間の相関が高かったため ( $r=.71$ )、2つを合計したもの（以下、「内発的動機」とする）を分析に使用した。また、「相互妥協スタイル」は、 $\alpha$ 係数が低かったため、分析から除外した。

まず、友人関係における動機づけと対人葛藤方略、友人関係満足感との関連を検討するために、2つの場面および頻度の3つおよび友人関係満足感に関して相関分析を行った。結果をTable 4に示す。友人関係における動機づけと対人葛藤方略に関しては、内発的動機と統合スタ

Table 3 各尺度の平均値、標準偏差および $\alpha$ 係数

		平均値	標準偏差	$\alpha$ 係数
友人関係における 動機づけ尺度	外的	2.00	.69	.63
	取り入れ	2.84	.98	.76
	同一化	4.29	.68	.75
	内発	4.66	.55	.84
対人葛藤方略（場面1）	統合スタイル	3.37	.50	.73
	回避スタイル	2.79	.80	.83
	強制スタイル	1.67	.63	.82
	自己譲歩スタイル※	2.45	.64	.68
	相互妥協スタイル	2.47	.53	.48
対人葛藤方略（場面2）	統合スタイル	2.72	.80	.82
	回避スタイル	2.74	.88	.71
	強制スタイル	1.59	.65	.82
	自己譲歩スタイル	2.69	.91	.91
	相互妥協スタイル	2.09	.58	.44
対人葛藤方略（頻度）	統合スタイル	3.99	.80	.85
	回避スタイル	3.39	1.11	.85
	強制スタイル	2.21	.90	.83
	自己譲歩スタイル	3.39	.82	.81
	相互妥協スタイル	2.94	.75	.57

注. 4項目中、「友人の要求に従う」を除いた3項目。

**Table 4** 友人関係における動機づけ尺度と各場面の対人葛藤方略、友人関係満足感との関連（相関係数）

		友人関係における動機づけ尺度		
		内発的動機	外的	取り入れ
対人葛藤方略（場面1）	統合スタイル	.38***	.04	.23***
	強制スタイル	.05	.35***	.22**
	回避スタイル	.06	.11	.29***
	自己譲歩スタイル	.11	.16*	.21**
対人葛藤方略（場面2）	統合スタイル	.30***	.12	.18*
	強制スタイル	-.06	.33***	.18*
	回避スタイル	.03	.12	.28***
	自己譲歩スタイル	.06	.02	.08
対人葛藤方略（頻度）	統合スタイル	.28***	.09	.19**
	強制スタイル	.08	.29***	.19**
	回避スタイル	.03	.23***	.36***
	自己譲歩スタイル	.14*	.26***	.33***
友人関係満足感		.36***	.01	-.07

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ 

イル ( $rs = .28 \sim .38, ps < .001$ ), 外的と強制スタイル ( $rs = .29 \sim .35, ps < .001$ ), 取り入れと統合スタイル ( $r = .18, p < .05; r = .19, p < .01; r = .23, p < .001$ ), 強制スタイル ( $r = .18, p < .05; r = .19, p < .01; r = .22, p < .001$ ), 回避スタイル ( $rs = .28 \sim .36, ps < .001$ ), 自己譲歩スタイル ( $r = .21, p < .01; r = .33, p < .001$ ) と正の相関が見られた。友人関係における動機づけと友人関係満足感に関しては、内発的動機と友人関係満足との間にのみ正の相関が見られた ( $r = .36, p < .001$ )。

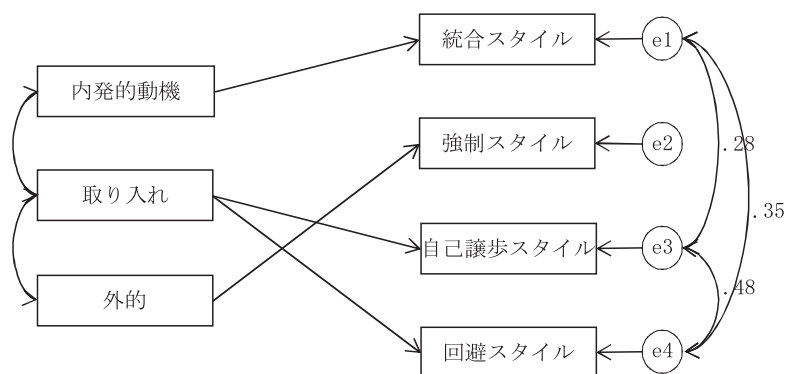
次に、友人関係における動機づけの3下位尺度を説明変数、友人関係満足を目的変数とした重回帰分析を行った。分析の結果、内発的動機から友人関係満足へ有意な正のパス ( $\beta = .41, p < .001$ ), 取り入れから友人関係満足へ有意な負のパス ( $\beta = -.23, p < .01$ ) が見られた ( $R^2 = .15, p < .001$ )。

最後に、友人関係における動機づけが対人葛藤方略に及ぼす影響を検討するために、問題部分において述べた予測を元に Figure 1 のモデルを想定し、共分散構造分析を用いたパス解析を行った。なお、2つの場面および頻度の3つに関して、各スタイル同士の相関が高かったため ( $rs =$

.45 ~ .68), 各スタイルの平均値を算出して分析を行った。分析の結果、モデル全体の適合度は、GFI = .973, AGFI = .936, RMSEA = .054 であった。内発的動機から統合スタイルへの有意な正のパス ( $\beta = .38, p < .001$ ), 外的から強制スタイルへの有意な正のパス ( $\beta = .36, p < .001$ ), 取り入れから回避スタイル ( $\beta = .30, p < .001$ ), 自己譲歩スタイル ( $\beta = .17, p < .05$ ) への正のパスが有意であった。

## 考 察

本研究では、友人関係が形成、維持される理由の多様性に焦点を当て、友人関係における動機づけと友人との間で生じた葛藤時の対処方略および友人関係満足感との関連について検討を行った。その結果、「一緒にいると楽しい」「友人といることで幸せになれるから」といった理由に基づいて友人関係を形成しているほど、友人との対人葛藤時に互いにとって有益な対処方略を行うことが明らかとなった。一方、他者からの働きかけにより友人関係を形成しているほど、自分の意見を押しつけるような方略を行うこと、また、友人がいな



注. 本研究においては、内発的動機と取り入れ、取り入れと外的の間、および、統合スタイル、自己譲歩スタイル、回避スタイルの誤差変数間に相関を仮定した。なお、誤差変数間の相関は、対人葛藤方略間の相関を元に仮定した。

Figure 1 本研究において想定したパス図

いことへの不安に基づいて友人関係を形成しているほど、相手から嫌われないようにする方略を行うことが明らかとなった。そして、友人がいないことへの不安に基づいて友人関係を形成することは、友人関係満足度を低下させる可能性があることが明らかとなった。以下では、得られた結果について考察を行っていく。

#### 友人関係における動機づけと対人葛藤対処方略

本研究では、自己決定理論と二重関心モデルを元に、友人関係における動機づけと対人葛藤対処方略との関連を検討した。自己決定性の高い動機づけは、自己と他者双方にとって有益な相互作用を促進するが、自己決定性の低い動機づけは、自己と他者どちらかに対して有益な相互作用を促進するため、結果的に友人との関係にとって望ましくない結果をもたらすことが考えられる。分析の結果、両者の関連については、おおむね予測通りの結果が得られた。自己決定性の高い動機づけは、友人との葛藤時に、双方にとって満足度の高い方略がとられていた。そして、自己決定性の低い動機づけの中でも、外的では、自己の意見を優先させる方略がとられ、一方、取り入れでは、相手の意見を優先させる方略がとられていた。取り入れのように、相手への関心を常に優先すること

が、必ずしも相手からの評価を下げないことにつながるとは限らないが、友人がいないと不安だと考えて友人とのつきあいをしている場合は、友人から嫌われることを避けるために、相手優先の方略を選択してしまうのだろう。

このように、自己決定性の低い動機の中でも、友人に対する行動が異なることは注目に値する。これまで、友人関係における動機づけは、自己決定性の高い動機づけを中心に検討がなされてきており、自己決定性の低い動機づけに着目されることは少なかった。しかし、本研究では、自己決定性の低い動機づけにも焦点を当て、動機づけの違いによって対人行動が異なることを示した。この結果は、現代青年における友人関係の特徴を捉えるうえで、多様な動機づけに基づく友人関係という視点が重要であることを示したと言えるだろう。

また、本研究の結果は、青年期の友人関係におけるネガティブな側面を扱ううえで、友人関係における動機づけに着目することの有用性を示している。これまでは、表面的なつきあい(岡田, 1993)や、状況に応じてつきあう相手を切り替える傾向(大谷, 2007)といった、従来とは異なる友人関係の存在は示されてきていたが、なぜ、そ



のような友人関係が見られるのかについては明らかにされてこなかった。本研究の結果、現代青年の友人関係における2側面は友人関係における動機づけの違いによってその理由を説明できる可能性があることが示唆された。表面的なつきあいや過度な気配りが必要な友人関係とは、外的や取り入れのような自己決定性の低い動機づけに基づいたつきあい方なのではないだろうか。相手からの働きかけによって友人関係を形成していたり、友人がいないと不安であるという感覚を持って友人とつきあっているために、相手とのコミュニケーションが表面的になったり、相手への気配り中心になってしまうのだろう。そして、対人葛藤対処方略に関する研究においては、これまで相手との関係性や責任の有無といったことに着目されてきたが (e.g., Laursen & Collins, 1994), 本研究の結果、相手との関係性だけではなく、当人が持つ友人関係についての動機づけにも着目する必要があることを示したと言えるだろう。

#### 友人関係における動機づけと友人関係満足感

友人関係における動機づけと友人関係満足感に関して、本研究では、自己決定性の高い動機づけが友人関係満足感の高さと関連し、自己決定性の低い動機づけが友人関係満足感の低さと関連すると予測し検討を行った。その結果、予測は一部支持された。一緒にいると楽しいからといった理由によって友人関係を形成しているほど、友人との関係に満足していることが明らかとなった。しかし、外的ではなく、取り入れが友人関係満足感の低さと関連していた。強制スタイルへの正の影響が見られる外的が友人関係満足感と関連がなかった点に関しては、以下のように考えられる。外的の場合は、そもそも相手からの働きかけによって友人関係を形成しているため、友人関係に対するコミットメントが低い。強制スタイルを多くとることで友人との関係が悪化する可能性はあるが、コミットメントが低いいため、その影響が少ないのではないだろうか。次に、取り入れが友人関係満

足感の低さと関連していた点について考える。取り入れの場合は、友人がいないことに対する不安などによって友人関係を形成しているため、友人関係に対するコミットメントは高いと考えられ、友人から嫌われることを避けるために相手優先のコミュニケーションを多くとっていると考えられる。しかし、友人関係満足感の低さと関連しているということは、自分自身が望んでいる友人とのコミュニケーションが取れていないと感じていることを示しているのではないだろうか。これは2つ可能性があり、1つは、実際に友人からあまり評価してもらえていないということ、もう1つは、友人が評価しているにもかかわらず、友人から評価してもらえていないと感じていることである。本研究においては、この点について明らかにすることはできないが、現代青年の友人関係の特徴を捉える上で着目すべき点であると考えられる。

#### まとめと今後の課題

本研究により、以下のことが示唆される。友人関係が形成、維持される理由にはさまざまなものがあり、近年、注目されてきている、表面的な友人関係や、相手からの評価を気にするために、過度に気配りを行う必要のある友人関係は、外的や取り入れといった理由から形成される関係のことを示している可能性がある。しかし、このような友人関係は、友人との対人葛藤時に相手へ自分の意見を押しつけたり、相手から嫌われないような対処方略を取りやすい。さらに、友人がいないと不安であるといった動機づけに基づく友人関係は友人関係満足感の低さとつながる可能性がある。対人関係において、関係満足の低下は関係の解消につながりやすいが、現代青年における友人関係においては、仲間はずれにならないために、たとえ満足感が低くとも友人との関係を維持している可能性があると考えられる。では、なぜ満足感が低くなる可能性のある動機づけにもかかわらずそのような動機により友人関係を維持しているのだろうか。その理由の1つに、友人を多く持って

いることそのものに価値があることが考えられる。友人を持つことの価値とは2つ考えられる。1つはサポート源としての友人である。友人がソーシャルサポートとして有益であることはさまざまな研究から明らかとなっている (e.g., 中村・浦, 2000; 嶋, 1991)。友人を多く持っていることで、多くのサポートを得ることが可能になると考えられる。そしてもう1つは他者からの自分自身に対する評価が高まる可能性があるということである。他者からの評価が高くなれば、結果的に今後より有益な相手との関係を形成できる可能性が高まることになる。人にとって集団内における評判が重要であることはさまざまな研究から指摘されている (e.g., 山岸, 2011)。宮本 (2009) は、友人の数と社会的自尊心 (自尊心の中の、自己に対する社会的な側面の評価のこと) との関連を検討している。その結果、友人の数が多くなるほど社会的自尊心が高くなることを見出している。友人の数が自分の評価に影響を与えるのであれば、人は、従来の友人関係のように「この人と一緒にいると楽しいから」という動機だけで友人になるわけではなく、「友人がいないと恥ずかしい、不安であるから」という動機であっても友人を形成する可能性がある。そして、一度作った関係はなるべく維持しておいた方がよく、そのためにはたとえ好ましくない仲間であってもそこからはずれないようにしていく必要が出てくるだろう。今後は、友人を多く持つことの価値という観点から、現代青年の友人関係を捉えていくことも必要になると考えられる。

本研究の問題点としては、今回の研究で性差について扱っていないことが挙げられる。友人関係の研究に関してはいくつかの性差が明らかにされている (e.g., 石田, 1998; 長沼・落合, 1998; 下斗米, 2000)。たとえば、男性は女性よりも友人との共行動を望んでおり、女性は男性よりも自己開示を望んでいること (和田, 1993) や、男性より女性の方が友人からの情緒的サポートを多く

受けていること (福岡・橋本, 1995) などがこれまでに明らかになっている。この点を考えると、友人関係における動機づけと友人との葛藤時の対処方略との関連が性別によって異なることは十分に考えられる。性差に関しては今後検討をしていく必要があるだろう。また、本研究においては、場面ごとの動機づけと対人葛藤方略との関連の違いには言及しなかった。相関分析の結果を見ると、取り入れと統合スタイルの関連など、予想していなかった結果がいくつか見られた。取り入れという自己決定性の低い動機づけが、建設的な対処方略である統合スタイルと関連が見られたことは興味深い。この点は今後、さらに検討をしていく必要がある。最後に、本研究は一時点のみでの質問紙調査であるため、今後、さまざまな動機に基づいた友人関係で行われる相互作用の結果、友人との関係や精神的健康にどのような影響があるのかに関して縦断的データを用いて検討していくことが必要であろう。

#### 引用文献

- Bagwell, L. C., Bender, E. S., Andreassi, L. C., Kinoshita, L. T., Montarello, A. S., & Mukker, G. J. (2005). Friendship quality and perceived relationship changes predict psychosocial adjustment in early adulthood. *Journal of Social and Personal Relationships*, *22*, 235-254.
- Baumeister, R. F., & Vohs, K. D. (Eds.). (2007). *Encyclopedia of social psychology*. Thousand Osaka, CA: Sage Publications.
- Benesse教育研究開発センター (2010). 第2回子ども生活実態基本調査 ベネッセコーポレーション
- 藤森立男 (1989). 日常生活にみるストレスとしての対人葛藤の解決過程に関する研究 *社会心理学研究*, *4*, 108-116.
- 福岡欣治・橋本 宰 (1997). 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャルサポートとそのストレス緩和効果 *心理学研究*, *68*, 403-409.
- 本田周二 (2008). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が対人葛藤時の対処行動に及ぼす影響 *東洋大学21世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター研究年報*, *5*, 143-147.

- 本田周二 (2009). 日本における友人関係研究の動向 東洋大学21世紀ヒューマン・インタラクショナル・リサーチ・センター研究年報, **6**, 73-80.
- 石田靖彦 (1998). 友人関係の親密化に及ぼすシャイネスの影響と孤独感 社会心理学研究, **14**, 43-52.
- 加藤 司 (2003). 大学生の対人葛藤方略スタイルとパーソナリティ, 精神的健康との関連について 社会心理学研究, **18**, 78-88.
- Laursen, B., & Collins, W. A. (1994). Interpersonal conflict during adolescence. *Psychological Bulletin*, **115**, 197-209.
- 宮本聡介 (2009). 友人ネットワークサイズが社会的自尊心に与える影響——日米の比較—— 日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会合同大会, 716-717.
- 長峰伸治 (1999). 青年の対人葛藤場面における交渉過程に関する研究——対人交渉方略モデルを用いた父子・母子・友人関係での検討—— 教育心理学研究, **47**, 218-228.
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, **10**, 35-47.
- 内閣府政策統括官 (2004). 第7回世界青年意識調査内閣府
- 中村佳子・浦 光博 (2000). ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について——対人関係の継続性の視点から—— 社会心理学研究, **15**, 151-163.
- 大淵憲一・福島 治 (1997). 葛藤解決における多目標——その規定因と方略選択に関する効果—— 心理学研究, **68**, 155-162.
- 岡田 涼 (2005). 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討——自己決定理論の枠組みから—— パーソナリティ研究, **14**, 101-112.
- 岡田 涼 (2006). 自律的な友人関係への動機づけが自己開示および適応に及ぼす影響 パーソナリティ研究, **15**, 52-54.
- 岡田 涼 (2008). 友人との学習活動における自律的な動機づけの役割に関する研究 教育心理学研究, **56**, 14-22.
- 岡田 涼 (2010). 自己決定理論における動機づけ概念間の関連性——メタ分析による相関係数の統合—— パーソナリティ研究, **18**, 152-160.
- 岡田 努 (1993). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖の心性」との関係 発達心理学研究, **4**, 162-170.
- 大谷宗啓 (2007). 高校生・大学生における状況に応じた切替——心理的ストレス反応との関連にも注目して—— 教育心理学研究, **55**, 480-490.
- Rahim, M. A., & Bonoma, T. V. (1979). Managing organizational conflict: A model for diagnosis and intervention. *Psychological Reports*, **44**, 1323-1344.
- Rubin, J. Z., Pruitt, D. G., & Kim, S. H. (1994). *Social conflict: Escalation, stalemate, and settlement*. 3rd ed. New York: McGraw-Hill.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, **55**, 68-78.
- 柴橋祐子 (2004). 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究, **52**, 12-23.
- 嶋 信宏 (1991). 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, **7**, 45-53.
- 下斗米淳 (2000). 友人関係の親密化過程における満足・不満足及び葛藤の顕在化に関する研究——役割期待と遂行のズレからの検討—— 実験社会心理学研究, **40**, 1-15.
- 丹野宏昭 (2007). 友人との接触頻度別にみた大学生の友人関係機能 パーソナリティ研究, **16**, 110-113.
- 遠矢幸子 (1996). 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥田秀宇 (編) 親密な対人関係の科学 誠信書房, pp. 90-116.
- 和田 実 (1993). 同性友人関係——その性および性役割タイプによる差異—— 社会心理学研究, **8**, 67-75.
- 山岸俊男 (2011). 集団内協力と評判心理 新世代法政策学研究, **10**, 109-144.

## Effect of Friendship Motivation on Strategies for Handling Interpersonal Conflict in Japanese Young Adults

Shuji HONDA

Center for the Science of Prevention Education, Naruto University of Education

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2012, Vol. 21 No. 2, 152-163

This study investigated the effects of friendship motivation on strategies for handling interpersonal conflicts and friendship satisfaction in Japanese young adults. Participants ( $N=218$ ) completed a self-report questionnaire about friendship motivation, interpersonal conflict strategies, and friendship satisfaction. The results of path analysis revealed that intrinsic motivation was associated with a more integrating style, external motivation with a more forceful style, and introjected motivation with a more avoiding and yielding style. In addition, the results of multiple regression analysis indicated that introjected motivation was associated with lower friendship satisfaction. These findings suggest that friendships among contemporary adolescents are based on both extrinsic and intrinsic motivation. Moreover, the results suggest that friendships based on extrinsic motivation have lower friendship satisfaction. The reasons for interacting with friends on the basis of intrinsic motivation are discussed.

**Key words:** friendship, motivation, strategies for handling interpersonal conflict

Copyright of Japanese Journal of Personality is the property of Japan Society of Personality Psychology and its content may not be copied or emailed to multiple sites or posted to a listserv without the copyright holder's express written permission. However, users may print, download, or email articles for individual use.